

デーモンハント～異世界編～

ガジャピン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アダルトショップの帰り道、主人公は突如として出現した穴に落ちてしまう。その穴を抜けた先は異世界だった。

魔法、モンスター、世紀末蛮族……元々いた世界とはかけ離れた環境で、主人公は元の世界に戻るため奔走する。

コメディ色強めの冒険ファンタジー。

目次

第1話	アブノーマルは突然に	1
第2話	唯我独尊系美少女登場!?	6
第3話	俺の名はアダム	12
第4話	紋章者	18
第5話	どんちゃん騒ぎ!	22
第6話	殺戮!	28
第7話	合格!	33
第8話	不穏な奇跡!	38
第9話	買い物!	43
第10話	旅立ちの時	48
第11話	イブとピユレ	54
第12話	短い旅	59

第1話 アブノーマルは突然に

突然だが、神隠しというものを知っているだろうか。

神隠しと聞いて千と千尋の神隠しを思い浮かべた人もいるかもしれないが、それでもいい。イメージは合ってる。

さて、何故いきなりそんなことを訊いたのか。

答えは単純。今まさに俺が神隠しの被害者になったからだ。

それはアダルトショップの帰り道で起きた。

俺は面白そうなDVDを発掘するため定期的にアダルトショップに行く。そして、いつも行くアダルトショップで『雌犬と雌猫のワンニャンパラダイスでラビット!』というDVDを見つけた。そのパッケージが傑作で、胸と局部の部分が切り取られた犬と猫の着ぐるみを着た女二人が、ジャングルで暮らす先住民みたいな格好をした男に左右から抱きついているパッケージだった。このパッケージを見た瞬間面白そうだとビビツと脳に電流のようなものが走り、そのDVDと他のDVD二つを手に持ち、会計に行った。ちなみに、他二つのDVDタイトルは『義妹とイケないことく寸止め巨乳JK』と『ラブラブ恋人エッチくずつとあなたを見つめます』。

正直に言うと、俺はこの二つのDVDは見るつもりがなかった。なら何故会計に持っていったかと言うと、まず第一にレジまで持っている間に他の客に見られないようにするためと、俺はマニアックではなくノーマルだと店員に伝えるためである(俺はこれをサンドイッチ購入と呼んでいる)。まあ俺が行くアダルトショップの会計レジは手元しか見えないようになっていたため、店員に顔を見られないが。ただこう、自分に言い訳して買うための勇気を出すみたいな感覚、男ならきつと誰もが理解してくれると信じている。理解しない男は一人残らずエロDVD買った帰り道に死ぬ。

で、その帰り道。車がそれなりに走り色んな店が並んでいるそこそこ賑やかな道を歩いていると、いきなり自分の足元の地面が消えたような感覚に襲われた。驚いて下を見ると、俺の下に黒い穴がぽっかり

と空いていて、俺の体はその穴に呑み込まれた。

落ちる直前、俺は助けにくれと前から歩いてきていた女性に叫んだが、女性は信じられないという表情を送ってきただけで、指一つ動かさなかった。

で、穴に落ちたと思っただけいきなり遙か上空にいた。つまりはスカイダイビングをしているわけだ。パラシュート無しで。この恐怖に耐えられる人間がいるのだろうか。

俺はその事実に向面したショックで気を失い、何かの衝撃で意識が戻った。

俺は目を開けて周りを見渡すと、どこか洋風の建物が辺りに並んでいた。白人、黒人、アジア系など、様々な人種の人々が俺を見てクスクスと声を殺して笑っている。

そこで俺は思い出した。

——エロDVD。

他のアダルトショップは知らないが、俺が買うアダルトショップではレジ袋は有色で中身が分からないようになっていた。だから基本は袋を開けられない限り見られる心配はない。

俺は地面に視線を向ける。そこには隕石が落ちたようなクレターができていた。その周りはまるでトンボ掛けされた野球グラウンドのようにきれいにならされた土。コンクリートで道が整備されていないことに疑問を感じるべきだったんだろうが、今の俺にとっては些事だった。俺の頭はエロDVDのことではいっばいだったのだ。

視線をさまよわせる。少し自分から離れたところに数人の男女が集まっていた。

俺はあちやくと頭を抱える。彼らが囲んでいる中心には、「わたしを見て！ ルックミー！」と言わんばかりにレジ袋から飛び出した三つのエロDVDが散乱していた。

「オ、ソーグッド！」

「アーユークレイジー!？」

「ゴートウヘッ！」

耳を澄ませば、彼らから英語のような言語が聞こえた。

俺はあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら、エロDVDを囲んでいる彼らに体当たりし、手に持っていたレジ袋に散乱したエロDVDを突っ込んだ。

いきなりの俺の攻撃に、囲んでいた彼らはぼかんとしていた。

俺はレジ袋にエロDVDを入れ終わると彼らに向き直り、右手の親指で自分をさして、

「アイー・アム！ ノーマル！ オツケエイ!？」

と叫んだ。

「……オ、オツケエイ……」

彼らは困惑しながらも返事をした……ようだ。リスニングが正しければ。俺は正しいと信じた。自分が変態ではなく普通だと相手に伝わったのを。

故に心から安堵し、颯爽と回れ右をしてその場から立ち去った……わけねえだろ。こちとらエロDVDが入ったレジ袋持ってんだぞ。脱兎のごとく無様に逃げたさ。なんか文句あるか？ 俺の立場なら誰だってこうする。故に、恥ではない。

俺はただその場から遠ざかりたいという理由だけで当てもなく走り続けた。

人通りの少ない路地に来てようやく走るのを止め、石造りの建物の外壁にもたれてそのまま座り込む。深呼吸して、バクバクいつてる心臓をなだめようとする。

—— 静まれ、俺の心臓。落ち着いて、現状把握だ。

ある程度落ち着き余裕を取り戻すと、改めて周囲を見渡した。木材や石材が使われた建築物しかなく、電力を使用するタイプの街灯は一つとしてなく、車も一台も走ってない。まるで数百年前のヨーロッパにタイムスリップしてしまったような錯覚に陥る。なんにせよ、日本ではないのは確定だ。ここの連中は日本語を話さない。多分英語を話していた。

自分の身に一体何が起こったのか。

一番可能性があるのは、これら一連の出来事が夢だということ。アダルトショップに行ったのも、あの真っ黒な穴に落ちたのも、意味の

分らない場所に来たのも、全ては夢。

そう考えて、俺は愕然とした。そんな荒唐無稽な予想が一番現実的な可能性であり、また頭では夢ではなく現実にいると確信しているからこそその衝撃であった。

毎日、退屈だった。

毎日、なんか面白いこと起きねーかなーと思ってた。

商業系の高校を卒業し即就職した。それから五年が経過し、一人旅、ゲーム、漫画、アニメ、映画、音楽、ダンス、ドライブ、釣り、登山、プチプチ、アダルトDVD漁りなど、様々な面白いことを見つけようとしてきた。確かに充実していたかもしれないが、心の奥底ではどれもじっくりこななかった。今でもそれらの趣味は続けているが、どこか惰性で続けているところがあつた。

だが、これはさすがにないだろう。誰がターミネーターみたく過去に行つて未来を変えたいと願つたのか。そもそも、ここは過去なのだろうか。ワープなんてあるはずがないが、もしワープで文明が遅れるヨーロッパ圏の国に行つたとしたら？ それか、俺は人さらに遭い、なんやかんやあつて外国に送られ、なんやかんやあつて人さらにから逃げ出し、なんやかんやあつてパラシユート無しのスカイダイビングをし、なんやかんやあつてエロDVDをぶちまけたのだろうか。

——いや、もつと真剣に考えろ。ニュースや雑誌で人が消える記事が無かつたか、よく思い出せ。

そう言えば数年前、殺人罪で投獄されていた女が突如として姿を消したとして、大騒ぎになつたことがあつた。神隠しだ！ なんてマスコミが決めつけて報道していたのを覚えている。

俺はハツとして、スマホを取り出し、電源ボタンを押す。表示された画面を見て、舌打ちした。圏外なのである。これでは電話はおろか、ネットで情報収集もできない。

俺は所持品を念入りに確認した。財布、家のキー、スマホ、カード入れ、メモ帳。エロDVD三枚。頼れるのは実質己の身一つ。おまけに、現在地も時間も分からない。

そこで、俺は空腹を覚えた。腹が減つては戦はできぬと偉い人も

言っていた気がする。とりあえず俺は現実逃避をすることに決めた。立ち上がり、どこかの飲食店を探すために人が往来している通りに向かって歩き出す。

こうして俺のゲームのような旅は始まった。

第2話 唯我独尊系美少女登場!?

俺は空腹のまま、とぼとぼと力なく活気のある大通りを歩く。

考えてみれば当たり前の話なのだが、日本の通貨である円がどの飲食店も使用不可なのだ。飲食店が駄目ならどの店に行つたつて駄目だろう。

幸運だったのは、エロDVD三枚を買った後だったので財布に千円ちよつとぐらいしか入っていないことだ。一万五千円がゴミになるより、千円がゴミになった方が精神的ダメージは少ない。だがダメージがねえわけじゃねえんだぞコラ。

今の俺は多分楽しみにしていたゲームシリーズの続編がクソゲーだった時のような顔になっているだろう。

もちろん円が使用不可だと理解した次に目指した場所は銀行である。銀行に行けば大抵は両替してもらえる。もし今いる場所と同じ世界に日本があれば、円の価値を知るこの場所の銀行は喜んで両替に応じる筈だ。

しかし、信じられないことにそもそも銀行が無さそうだった。自分の探索不足かもしれないが、銀行は人通りの多い道に面しているのが普通。人気のない場所に銀行はよっぽどない限り置かない。銀行がない。その事実に至った衝撃はアメコミとかでよくあるバングという擬音とともにピストルで頭を撃ち抜かれたようだった。銀行だけにバングってね。

それから、この場所はどうやら英語ではなく、英語によく似た言語が使われているようだ。英語感覚でなんとなく読めるが、英語そのものではない。

——これは……さすがに確定か。
ずっと考えないようになってきた可能性。すなわち、異世界への転移。

娯楽物ではよくある設定のため、当然俺の頭には異世界転移という文字がずっと浮かんでいた。

——マジかあ……。

「あの……すみません！」

俺がショツクのあまりその場でソーラン節を踊っていると、まっすくな黒髪を肩の辺りで切り揃えている美少女に声をかけられた。間違はなく美少女。アイドルとかモデルとか、いわゆる芸能人についても違和感のない顔をしている。上半身はぴったりとした白色の麻の服。腰のベルトには剣が二本、両腰の辺りに鞘ごと取り付けられていた。下半身は暗めの赤色のレザーパンツ。両膝にナイフホルダーが付けられていて、それぞれ四本ずつ短剣が納まっている。背には身の丈ほどの抜き身の大剣を背負っていた。

だが、今の俺は容姿より気になることがあった。

「へ？ 日本語？」

そう。他の連中が英語やら中国語やらフランス語やらヒンディー語やらスワヒリ語やらを話しているのを聞いたことはあるが、日本語は聞いたことが無かった。

で、ここで一つ、海外に一人で旅行に行つて学んだ教訓を教えよう。それは、相手の方から親切そうに声をかけてきたら十中八九要注意人物だ。信頼してほしいはい付いていたら財布からパスポート、髭剃りも何もかも盗まれ、最終的に日本領事館のお世話になりました。今では良い思い出です。日本領事館の職員さんにはこの場を借りてお礼を申し上げます。あ、この話聞いて「こいつマヌケだな」とか思った奴は公共交通機関を利用して時盛大に漏らして大恥をかけ。

で、その理屈でいくと、この美少女は十中八九要注意人物なのである。綺麗な薔薇には刺があるとよく言われるが、この美少女もそうかもしれない。

「あたし、日本人なんです」

「ああ、そうなんですか。よく俺が日本人だつて分かりましたね」

「なんていうか、日本！ って感じが全身からかもしだされていたんで……」

そら道の真ん中でソーラン節踊つてたら誰もが日本！ って感じになるわな。

納得した俺は頷き、先を促す。

美少女も領き返し、言葉が続ける。

「それで、物は相談なんですけど、同じ日本人同士、協力し合いませんか？」

きたきた、と俺は思った。

そう言つて仲間が隠れている場所に誘導し、強奪する。よくある手口だ。

こんな見え透いた手に俺は引つ掛からない。

「ありがたい申し出ですが——」

「食事をぐ馳走しますよ」

「行きます。こんな美少女に食事をぐ馳走してもらえるなんて、俺は幸せものだなあ。はっはっはっ」

美少女も大口を開けて笑っていた。

今にして思えば、気付くべきだったのかもしれない。美少女と呼ばれるカテゴリーに大口を開けて笑う美少女は含まれないと。

だが、背に腹はかえられぬというし、今の自分にとって奪われて困るのは何もない。強いて言うなら『雌犬と雌猫のワンニャンパラダイスでラビット!』ただ一つ。もちろんお楽しみ的な意味でだ。奪われる可能性も低い。なら、乗るしかないだろう。このビッグウエーブに。この美少女の胸にはウエーブはないが。

で、俺はほいほい美少女に付いていき飲食店に……ではなく、なんか役所みたいなところに連れていかれた。ちなみにこの美少女、背中のベルトにも短剣が二本、鞘ごと取り付けられている。この美少女の持つ短剣は、見える部分だけで十本あるということだ。更に剣が二本と、身の丈ほどの大剣。えくと、アサシンクリードの熱烈なファンかな？

元々百パーセントこの美少女を信頼していたわけじゃなかったの
で、俺は疑いの目を美少女に向ける。

美少女は俺の視線に気付いたのか、振り返つてにこりと笑い、

「ここに転移してきた人はこうして役所で登録しておかないと、色々面倒になるんですよ」

と言った。

俺は驚きつつ、

「え？ 転移される人って珍しくないんですか？」

と訊いた。

「はい。もうしよつちゆう空から人が降ってきますわ。日常茶飯事です」

ああ、だから俺の周りは大騒ぎをしておらず、エロDVDの方に心が寄せられたのか。クソが。

と、ここで俺は疑問が浮かんだ。

「そういえば、なんで遙か上空から落ちて死なないんです？」

「ゲートをくぐる際、物理的ダメージを一度だけ無効にする魔法がかけられるんです。だから、地面にまっ逆さまに落ちれば死にません。逆に途中で鳥とかドラゴンとか建物とかにぶつかったら、そこで魔法が切れて死ぬか重傷を負います」

さらつとんでもないこと言ったぞこの美少女。

つまり、俺は運試しを転移させた奴にやらされたわけだ。ふう〜！
地面にまっすぐ墜落して良かったぜ！

「あ、ちよつと指借りますね」

そう言つて美少女は俺の右手を取り、受付に置かれている赤色の液体に俺の人差し指をつけ、赤く染まった俺の人差し指を何かの書類に押しつけた。

その書類を見つづ受付の女性が笑顔で何か言ったが、俺には意味が分からない。やはり英語ではない。

「どうしたんだい、のび太くん」

俺が困惑した表情を浮かべていると、ドラえもんの声真似をした美少女が声を掛けてきた。俺はさらに困惑したが、一応美少女のノリに乗った。つまり、のび太くんの声真似をしたのだ。……自分でも何やってるんだと思う。

「何しやべってるか全然分からなくて困ってるんだよ〜」

「まったくしよつちゆうがないなくのび太くんは。そんな時は……ピコンチャチャチャ翻訳お札〜」

美少女は道具を出す時の効果音も完コピしつつ、一枚のお札を高々

と掲げる。

「翻訳お札?」

「このお札を身体はどこかに貼ると、どんな言語も脳内で理解できる言語に翻訳されるんです。もちろん相手に話す時も、相手の理解できる言語に翻訳されますよ」

「ご都合主義すぎない?」

「今までの転移者の知恵と努力の結晶です。断じてご都合主義ではありません」

美少女は俺の右腕の袖をまくり、腕にお札を貼り付けた後、受付の女性にもう一度さっきの言葉を繰り返してほしいと頼んだ。

「かしこまりました」

受付の女性は嫌な顔一つせず、頷いた。てか、マジで言葉分かる……。俺は感動していた。

「冒険者の登録完了しました。アダムさんはイブさんのパーティーとして、テイルローズでの活動を許可します」

「……は?」

確かに、受付の女性がこういう意味合いの言葉を言ったと理解できた。だが、理解できても納得できるかどうかは別の話。

アダム? イブ? パーティー? テイルローズ? なんのこっちゃ。この翻訳お札がおかしくなったんだな。きっとそうに違いない。

美少女は振り返って俺を見た。

それは劇的ビフォーアフターだった。

なんとということでしょう。見る者に希望と温かみを与える天使のような愛らしい微笑みをしていた美少女が、他人の不幸を嘲笑う悪魔のようなゲスな笑みを浮かべているではありませんか。媚びた感じはすっかり消え去り、素材そのものの魅力をしつかりと前面に出しています。

美少女の唇の端が吊り上がった。

「これからよろしくな、アダム」

「ノオオオオオッ!!」

俺の絶叫は役所を駆け抜け、付近の店内まで届いた。
人は過ちを繰り返す。そんな言葉が脳裏をよぎった。
イブとかいう美少女は俺の顔を見て、笑みを消し怪訝そうな表情になる。

「なんで笑ってんの？」

「……え？」

俺は絶叫を止め、右手で顔に触れた。

自分の人権がこの美少女に握られ恐怖しているのに、俺はこの予測不能な展開をどこかでわくわくもしているらしかった。

第3話 俺の名はアダム

さて、そもそもである。そもそも何故アダムなのか。俺には当然日本の国籍があり、氏名もある。

まあ俺を騙すため、俺に名前を訊かず勝手に名前をでっち上げる必要はあったかもしれない。だが、何度も言う。何故アダムなのか。ホワイ!?

俺はどこからどう見てもアジア系の顔であり、間違っても白人系の顔ではない。もつと日本的な名前を付けるのが自然である。

「なあ、一つ訊いてもいいか」

俺はもう目の前の美少女に敬語は使わなくなっていた。騙してきた相手に下手に出る必要はない。

「何さ」

「何故アダム？」

「覚えやすいじゃん」

「ああ、覚えやすいな。1192いいくに作ろう鎌倉幕府くらい覚えやすいけど、俺は日本人だろ。どこをどう見ても。誰が日本人にアダムなんて名前を付けるんだ？ キリストの皆さんが激怒されても知らねえぞ」

「そうだったらお前がボコられるだけじゃん」

「あつ、それもそうか。なら良いわ……ってなるか！ なお悪いわ！

言つとくがイブって名前のお前もボコられるからな。どつからどう見ても日本のプリティーガールじゃん」

「あたしには秘策があるから」

「あ、そうなのか。良かったな。でも俺はちっとも良くねえんだよ。てか、俺の名前はアダムで終わりか？」

イブはふるふると首を横に振る。

「アダム・ゴドストがフルネーム」

ゴドスト？ なんだそのファミリーネーム？ なんか意味があるのか？

「ゴドストはどつからきたんだ？」

「ゴッドストーリーをもじって」

「分かるか！ ドラゴボって聞いて『ドラゴンボールね』と連想できる奴しか辿りつかんわ！」

「なら、もう一つの候補の方が良かった？」

「もう一つ？」

イブは俺の耳に顔を近付けた。

「ジユウカン・スキー」

「……は？」

イブから小さく呟かれた言葉に、顔から汗が吹き出す。獣姦・好きー？ まさかこいつ……。

『雌犬と雌猫のワンニャンパラダイスで——』

「アイ！ アム！ アダアム！ イエエエエ！」

俺はイブの声を遮るように叫んだ。

拳を突き上げ、親指で自分をさし、ステップを踏む。

「あははははは！」

イブは俺を指さして無邪気に笑っていた。

この壁女が……、と俺は心中で悪態をつく。

このイブって女は、俺があの場合に落ちた時から俺を見ていたのだ。俺が走って逃げたのも、飲食店を巡り歩いていたことも全て、俺の後をつけて見ていたに違いない。この世界に来たばかりの俺を力モにするために。

——まんまとハメられた！

俺はイブをキツと睨む。

「最初から俺を狙ってたな」

「まあね。でも、悪くないだろ？ あたしはこの世界に来て三年だから色々この世界について教えてやるぜ？ 食事でもしながら。まあアンタに選択肢はないけど。もうあたしのパーティーメンバーだし」
辺境の地に行った時、一番必要なのは金でも食糧でもサバイバルグッズでもパーティーグッズでもなく、現地をよく知っている優秀なガイドだ。

そういう意味からすれば、三年この世界で生きているイブと一緒に

行動して損はない。俺はそう判断した。今にして思えば早計だった。三年もこの世界にいるのに一人で行動していることに何の疑問も感じなかった。

俺は深呼吸して平常心を取り戻した後、イブに向かって右手を差し出した。

「オツケー。これからよろしく」

「握手は嫌」

「なんで？」

「赤い手に付くじゃん」

「お前のせいだろ！」

「あはははははー！」

イブは愉快そうに笑う。

俺は深くため息をついた。

イブという美少女が常識人から逸脱した存在だと思いつくのは、二人で飲食店に入った時だ。

ちようど夕食どきということもあり、飲食店はどこも並んでいて満員だった。

こういう場合、普通の人は遅くなってもいいから並ぶか、諦めるか、すいている飲食店を探すか、これら三択の内のどれかを選ぶだろう。

だが、イブは違った。

並んでいる人々を強引に押しつけ、店主が文句を言うために厨房から出てくると、イブは腰に下げている袋からキラキラと赤く輝く握り拳くらいの大きさの石を取り出した。

「これでこの店、一日貸し切りにしたい」

「え……ッ？ ほ、本当にたったそれだけいい？ この店買収しに来た、違う？」

「……そんなに価値の高い物ですなの？」

俺が横から口を挟む。てか、翻訳お札Google翻訳みたいになっただけだ。さっきの受付の人の言葉はまともだったから、札にも調子があるのかな？ 早く改良品作れ。

店主はぶんぶんと頭を上下に振る。

「みなさん誰だつて知ってるです。これ魔の力凝縮石——魔石です。ですがこれほどの大きさに純度……間違いなく上級クラスのデーモンのもの。これだけで家何軒買えるですよ」

「マジですなのか!?!」

「ふっふっふん。まあ、あたしはそこそこ経験を積んだ冒険者だし？

それくらい手に入れることができて当然よ」

「すみませんです！ お客様の方々！ これから明日のこの時間まで、このお二方の貸し切りなつた！ 本当に申し訳ないですが、店から出てけ！」

家を何軒も買えるお宝が手に入るチャンスなのだ。店主が最低の対応をしてしまうのも仕方ない。当然、他の客からすれば迷惑でしかないため、そこら中から罵声と怒声があがる。

「おい、イブ。こんなことしたら客からフルボッコにされるぞ」

「あたしは大丈夫」

「誰がお前の心配してるか！ 俺がフルボッコにされるつつつてんの！」

「だったらあたしが全員の相手するよ」

イブが腰にくくりつけてある剣の柄に手をかけた。

俺の顔から血の気が引く。

「待て待て！ 俺に考えがある！」

「何さ？」

「んんツ」

と俺は咳払いした後、

「食事中の皆さん方！ 俺たち別に皆さん、出て行ってほしい違う！

ただテーブル一つ開けてほしい、食事したいだけ！ またこうして一緒なつた何かの縁！ 皆さん方のお代、全て俺たち払う！ 好きなだけ飲む、食べるしてください！」

俺は後ろを振り返り、

「今並んでいる方たちの皆さんもお代払うします！」

俺の言葉を聞いた客たちは歓声をあげた。

俺は店主に向き直り、

「そういうことなのです、他の客追い出す必要ありません。それから、彼らの食事代全て俺たち」

「ああー。私お客様追い出す心痛む、店の評判落ちる！ あなたのご厚意、感謝します！ どうぞお好きなだけご注文ください！ もちろん、皆さまも！」

「イエエエエエ！」

客たちが一斉に拳を突き上げた。どんちゃん騒ぎが始まる。

俺はふうくとひと息つき、イブの方を見る。

「おおー」

こんな騒動を引き起こした元凶はパチパチと手を叩きながら、感心したような声をあげていた。

「アダム、面白いことするね」

「いやいや、お前ほどじゃねえよ」

「えへへ、そうかな」

「褒めてねえよ」

俺は深くため息をついた。このイブって女のトラブルメーカーよりは胃薬がどれだけあっても足りないかもしれない。

店主が店の奥、従業員が休憩や食事で使用する部屋に俺たちを案内する。確かにその部屋ならどれだけ客がいようと関係ない。いつも空席だ。

俺たちは四角い木のテーブルが二つある内の一つに向かい合って腰かける。椅子はテーブルごとに四脚置かれていた。

接客らしき若い女が水の入った木製のコップを二つと何枚かの紙が束ねられたメニューらしきものを持ってきた。

「なあ、アダム」

「なんだ」

「腹減ってる？」

「今ならイギリス料理だって喜んで食べるさ」

「そうか。よっぽど腹減ってるね」

イブはにやりと笑った。悪戯を思いついた子どものような笑み

だった。

「注文だ！」

イブが叫ぶと、すぐに若い女が駆け込んできた。

「はい！ どうぞ！」

「メニューのここからここまで、全部持ってくるよろしい」

イブがメニューの左斜め上から右斜め下まで人差し指でつつとなぞる。

若い女はびっくりして声を出すのを忘れていたようだったが、数秒後我に返り、

「は、はい！ ただいま！」

と慌ただしく出ていった。

「イブ。お前の今やったやつ、飲食店で一回はやってみたいことナンバーワンのやつじゃん」

「今度はアンタにもやらせてやるよ」

イブは無邪気に笑った。

こうして見るとやっぱり可愛いな、と俺は思った。性格は問題ありだけど。

第4話 紋章者

テーブルにはこれでもかというくらい様々な料理が並び、一つのテーブルでは置ききれないのでもう一つのテーブルも使ってイブが注文した料理はようやく並べ終えた。

イブは骨付き肉の骨を持ち、豪快にかじりついている。俺の知っている美少女とはやはりカテゴリーが違うらしい。

俺も何の肉かは分からない肉料理や魚料理、サラダ、スープ、パンをナイフとフォークを使って次々に食べた。空腹は最高の調味料とはよく言ったもので、どの料理も満足のいくうまさだった。

「あたしが色々説明してもいいけど、それよりアダムの質問に答えた方が都合が良いだろ？ なんでも質問ウエルカム！」

イブは食事の手を休めず、そう言った。どうでもいいが、口に物を入れて喋らないという基本的なマナーも身に付いていないのか。俺はイブの両親の顔を見たくなくなった。

俺は口の中にある物を呑み込んだ。

「じゃあ、まず俺をこんな場所に転移させた物好きは誰だ？ それから、転移させた理由は？」

「おつ、いきなり核心を突くね。あたしたちを転移させたヤツは、実は正確には分かかってないんだ。転移させた理由も不明」

イブはお手上げと言わんばかりにナイフとフォークを持った両手を頭上にあげる。

——知らないのかよ。

俺はがっかりしたが、口に出しては言わなかった。

それより、イブの微妙な言い回しが気になる。

「正確には分からないってことは、ある程度予想はついてる？」

イブは唇の端を吊り上げた。口には茶色っぽいソースが付いている。

「この町からずっと南に行ったところに、森がある。その森の奥に住んでると思われるヤツが、転移させた物好きの最有力候補。あたし紋章者は『ゲームマスター』って呼んでる。ほら、この世界ってゲー

ムミたいな魔法やらモンスターがいるから」

俺は頭が痛くなった。

紋章者？ 魔法？ モンスター？

一つ一つ訊き、情報を整理しなければならぬ。

「ちよつと待つてくれ。紋章者？ 異世界人じゃなくて？」

「気付かなかつたのかよ。自分の体を見てみな」

俺は座ったまま、自分の体を見る。別段変わったところはない。

イブがいきなり前屈みになり、襟を引っ張って服の中を見せる。全く谷間のない布製の灰色ブラジャーの上半分、鎖骨の辺りに蝶の両羽のような紋様がタトゥーのように淡く刻まれている。

俺もイブ同様、襟を引っ張って自分の服の中を見た。イブと全く同じ紋様が腹に刻まれている。俺はプロサッカー選手でもなければAV男優でもないのだから、タトゥーを彫ったことなんて生まれてから一度もない。

「ゲートを通った時、その紋章があたしに刻まれた。そう考えて間違いない」

「ゲームマスターとやらはヤクザかな？ 俺たちはいつの間にか構成員にされたわけだ」

「案外悪いもんでもないさ、これは。魔法が使えるようになる」「魔法!？」

「個体差はあるけどね。大抵はこの世界の住人より高い魔力適性を得る。そのせいかな、紋章狩りなんて言って紋章者を殺して皮を剥ぎ、自分に貼り付けるヤツまで出てくる始末さ」

「……恐ろしい話だな。ところで、魔法を使うためにはどうすればいいんだ？」

「魔法には基本的に三種類ある。魔力だけの魔法と、呪文と魔力さえあればいい魔法と、呪文と魔法陣と魔力が必要な魔法。例外で何かしらの供物が必要だったり、対象に対して手順が必要だったりするけど、説明すると長いし面倒くさいから、今はしない。いいね？」

「オツケー。つまり、呪文さえ覚えれば、俺も魔法が使えるわけだ」

俺は興奮しているのを自覚した。自覚しても抑えられない。どん

な魔法が使えるのかと、俺はそればかりを考えていた。

イブが意地の悪い笑みを浮かべた。

「一つ、呪文を今から教えるよ。照明魔法。呪文はライト。しっかり光のイメージを頭に浮かべ、意識を集中させて唱えるんだ」

「ライト」

俺は光る玉を頭に思い描き、意識を全身に集中させる。

呪文を唱えると、体が一瞬熱くなり、右手の平から光球が現れた。

「は、ははははははは……」

俺は笑った。この非現実のような世界が現実であることを実感し、笑うしかなかった。

イブが口笛を吹く。

「筋良いじゃん。けど、残念だな。魔法型か。面白いものが見られるかもと期待したのに」

「魔法型？」

「どうやら二種類の傾向に分かれるみたいなんだよ。魔法型と肉体型に。魔法型はその名の通り、魔法を使用するのに長けている。呪文やら魔力以外の何かが必要な魔法が得意で、魔力だけの魔法は不得意。そっちの場合、あまり効果は期待できない。」

肉体型は魔力だけの魔法は得意だけど、魔力以外の何かが必要な魔法は苦手。使えなくもないけど、多大な負担を強いられる」

「……ちよつと待て。もし俺が魔法型じゃなくて肉体型だったら、今頃どうなってた？」

「反復横跳びをインターバル無しで三十セットやった後みたいな顔になってたね」

「畜生が！　なんで事前に教えなかった!？」

俺は頭に来て怒鳴った。

怒鳴られても、イブは悪びれずに、むしろ俺の反応を楽しむような笑みになる。

「悶え苦しむところが見たかったから」

「イブくん！　せめてオブラートに包んで発言しよう！　俺の心がブレイクしてしまうぞー！」

「あたしは悶え苦しんだのに、アンタは苦しまないなんて不公平じゃん。あと、心ブレイクするところ見せて」

「頭イカれてんのか!？」

俺は出した光球を八つ当たり気味に殴った。

光球は壁に飛んでいき、壁に貼り付く。

室内は真昼のように明るくなった。

思わず立ち上がっていた俺は深く息をし、ドカッと椅子に腰を下ろす。

イブは平然と食事を再開していた。

「……で、モンスターってのは？」

「本とか、映画とかにでてくるような、凶悪な生物、ドラゴン、死霊とか、そんな感じの奴らの総称。この世界の住人は『デーモン』って呼んでるけどね」

「魔法にモンスター……ハリー・ポッターの登場人物になった気分だ。マジックアイテムはあるかい？」

「マジックアイテムが魔法付与された道具という意味ならあるよ」
「パーフエクトじゃないか!？」

これで俺も魔法使いだわーい! ってアホか!

本格的に死の危険を感じ取り、俺の心に恐怖が宿った。身震いする。

それでも、この場から逃げようとは思わなかった。

そんな俺を、イブは興味深そうに見ている。

「この状況で笑みを浮かべるなんて、やっぱりアンタ変わってるね」

俺はハツとして、自分の顔を右手で触れた。笑ってた? 俺が?
適当なこと言いやがる。

——俺は普通だ。

そう言いたくなかったが、止めた。

俺は目の前の料理を片付ける仕事に戻った。

第5話 どんちゃん騒ぎ!

二人して山のような料理をガツガツ食べていると、さつき接客に来た若い女が廊下をうろうろしていた。

イブはぱたぱたと若い女に向かって手を振る。

「どうかした?」

「あ、いえ、休憩時間になったのですが、休憩する場所が無くて……」
「じゃあ、その空いてるテーブル使って。テーブルの料理は好きに食べていいから」

「ありがとうございます! お言葉に甘えさせてもらいます!」

そう言うと、若い女は俺とイブの間の椅子に背を向けて座った。

輝くような金髪に青の瞳。整った顔をしているが、鼻の周りにあるそばかすが彼女の整った顔に影を作っていた。だが不思議なことに、そのそばかすというマイナスポイントが逆に彼女から愛嬌のようなものを感じさせ、気軽に話しかけられる雰囲気がある。それに、胸はイブとは比べものにならないほど豊満。しかし腰はきゅつとしていて、思わず二度見してしまうような見事なスタイルだ。

それから三人で食事を続けた。

五分後、若い女は俺たちのテーブルの椅子に移動し、食事を再開した。

俺と目が合うと、女は愛想よく微笑む。俺は照れくさくなって視線を逸らした。

「わたし、リアって言うの。お兄さんの名前は?」

「俺の名はアダム。そっちの色気のない女はイブ」

「誰の色気が無いって?」

イブが木製のコップを投げ、俺の頭にぶつけた。木製だが普通に痛かったので、俺は頭を押さえて何度もさすった。

リアはクスクスと楽し気に笑っている。

「みんなの食事を奢るなんて、お兄さん粋なことするねえ」

「いやいや、普通だよ。それに、そもそもイブがいたからそういうことができたんだし、イブのおかげさ」

「みんなに奢りますって言った時のお兄さんの顔、カッコ良かったよ」
リアが俺の方に体を寄せ、豊満な胸を押しつけてくる。目は潤んで
ぽおーっとしていた。

ん？ と俺は思った。

俺はイケメンでもなければ、美少年でもない。女にモテるタイプ
じゃないのだ。

もしこの店がキャバクラのような、女の子がボディタッチを当たり
前のようにしてくる店なら、純粹に女の子とのボディコミュニケーション
ションを楽しんだだろうが、この店はただの飲食店。そんなサービス
は無いはずだ。

だから俺は嬉しいという気持ちより、警戒心の方が強くなった。

さりげなくリアを俺の体から引き離す。

「いや〜、お姉さんみたいな可愛い子に言われると照れるな〜」

俺はとりあえず褒め返しをして、無難にこの場を乗り切ろうと考え
た。

リアは満面の笑みになり、

「やだ〜、可愛いだなんてお兄さんやだ〜」

とより体を俺に密着させてきた。

俺が助けを求めようとイブを見ると、イブはニヤニヤしていた。

「ユー、ヤッチまいなよ。男はモンモンウジウジしてるより、ムラムラ
イライラしてる方が良いとあたしは思うぜ？ それとも、まだ童貞
？」

「童貞で悪いか！ 初めでは好きな人として決めてんだよ！」

もちろん嘘だが。

「乙女か！」

とイブがツツコミを入れた。

「ドーター？」

リアが首を傾げて呟いた。

「一度も『まぐわい』をしたことない男のことだよ」

イブがご丁寧童貞の解説をリアにした。ファック！

リアはポツと顔を赤らめ、伏し目がちになりながらもチラチラと俺

の顔を見る。

「わたしは、その、一度もまぐわってない人でも、全然……」

俺は言い知れない不安感のようなものを感じた。

だが、極めて残念なことに、俺の股間の宝剣（未使用）は「オツケイ！」と言わんばかりに鞘を抜き払い、臨戦態勢になっている。オツケイ！　じゃねえよクソが。早く鞘にしまえ。

え？　何故宝剣なのかって？　それは俺が包茎だからさ。包茎だけに宝剣ってね。死ねよボケが。全然上手くねえんだよ。

ちなみに、包茎の男性は仮性を含めると七割以上と言われている。つまりズル剥けの方がマイノリティ。包茎こそマジョリティーであるのは疑いようのない事実であり、スタンダードなのだ。また生物学的に見ても、性器が皮に包まれ保護されているのは自然である。包茎こそ正義！　性器だけに！　……つとに今の俺の心理状態は最悪だな。

「ほらお兄さん、飲んで」

リアが小麦色に輝く液体が入った木製のコップを渡してきた。ひと口飲んでみると、苦味の強いビールのような味がした。

「これは酒？」

「エールよ。ほらほら、飲んで飲んで」

リアはイブにもエールの入ったコップを渡した。

俺はイブの反応を窺う。どう見てもイブは十代に見えたからだ。

イブはコップを受け取ると、俺の予想に反してコップのエールを一気に飲み干し、空になったコップを俺の方に向けて笑い声をあげた。「レデイに年齢を尋ねるのは失礼だと承知しているんだけど、イブって何歳？」

「二十三」

「十代にしか見えなかった」

「よく言われる」

俺はエールを一気飲みせず、ちびちびと飲む。

「イブさん。さあさあ、もっとどうぞ」

「ありがとう」

リアはイブのコップに瓶でエールを注いだ。

そうしていると、客席の方からたくさんの人たちが一様にエール瓶を一本持つて現れ、柔和な笑みを浮かべながら俺たちに近付いてくる。

「いや、今日あんたらと出会えて良かった！ 夕食ごちそうさま！

まだまだ夜は長い！ お互いもつとこの一時を楽しみましょう！」

「そうだ！ あんたら最高だぜ！ 何か困ったことがあったら俺に言いな！ 力になってやるよ！」

「もつと酒を飲んで騒いで踊ろう！ 今日という日に感謝し、時を忘れて楽しもう！」

それからは代わる代わるコップにエールを注がれ、トイレで指を口に突っ込んで吐き、それからまたテーブルの食事を食べた。何故そんなことをしたかと言えば、酔ったように見せかけるためだ。

正直に言えば、俺はただ口を付けるだけであまりエールを飲まなかった。勢いよくエールを飲む振りをして、コップの中身のほとんどを首元から下にこぼした。

こんな得体の知れないところで酔い潰れるなんて冗談じゃない。それが俺の本音だった。たとえそれが好意であったとしても、俺は拒絶を選んだ。

それでもそれなりにエールは飲んだから、足がふらつく程度には酔ってしまった。

いつの間にか店内にはノリの良い音楽が流れていた。こういう店は音楽を演奏する人を数人雇っているのが普通らしく、店の隅で様々な楽器を使つて演奏していた。

リアが俺の腕をとる。

「お兄さん、一緒に踊ろ？ 踊り方教えるから」

「あ、俺が最近この世界に来た人間つて知ってたんだ？」

そう俺が訊くと、リアは笑った。

「お兄さん、有名人なんですよ。昼に来たお客さんが口々に言つたもの。『裸の女が描かれている物を持って落ちてきた奴は前代未聞だつて』」

もし周りに人がいなかったら、今頃俺は「ふええええ！」と泣いているだろう。それくらい恥ずかしかった。

「わたしはそういうの、気にしないので。お兄さんのこと、別に気持ち悪いとか思っていないですから」

リアはまるで聖母のような笑みを浮かべた。言葉のナイフつてのは悪意をもって刺されるより善意をもって刺された方が痛いんだなと、俺は痛感した。

それからリアに踊り方を教えてもらいながら、他の客たちと一緒に踊った。どうやらダンスはこの世界の数少ない娯楽の一つのようだった。俺はダンスは好きだし今でも暇な時はダンスを踊るから、この一時は純粹に楽しかった。

踊り終わると、イブのところに戻ってきた。

イブは未だに客たちにエールを代わる代わる注がれていて、注がれたエールを全て馬鹿正直に飲み干していた。顔は赤くなり、眼の焦点も定まっておらず、まるでそういう機械になってしまったかのように笑い続けていた。

——こいつには危機意識とか警戒心とかないのか？

こんな場所で酔い潰れて方が一何かあったらどうするのか、イブはちゃんと考えているのだろうか？ 見知らぬ地は疑心暗鬼になって慎重に行動するくらいがちょうど良い。

イブは虚ろな瞳をしつとも笑っているアブない人間になっていた。周りの客たちを虫でも追い払うようにしつしつと手を振って部屋から追い出すと、イブは俺の右腕に抱きついた。

「なあ、アダム、そろそろ行こうぜ」

「……行くなって、どこに？」

「ラ・ブ・ホ」

「はあ!？」

「あはははは！ 冗談だつて！ ラブホなんてあるわけないじゃん！

あたしの泊まってる宿だよ。やくど！ あはははは！」

「もしかして同室？」

「つたり前じゃん！ なんで二人寝れる部屋なのにもう一部屋借りな

きやなんないんだよお。お金がもつたいないだろお？」

それを言うなら家何軒も買えるようなお宝を飲食店の一日貸切に使ったのはどうなのよ？ と俺は思ったが、口には出さなかった。

イブの寝込みを襲おうなんて微塵も考えてないし、野宿じゃなくてしつかりしたベッドで寝れるなら、誰と一緒にだつて天国だ。

俺はずつと付いてきていたリアに別れを言い、イブの右腕を肩に回してイブを引き摺るように店を出た。イブは酒を飲みすぎて一人で立てなくなっていたからだ。ほんと何やってんだよ。

第6話 殺戮!

イブを抱えながら、大通りらしき人通りの多い道を歩く。もう夜中で明かりも松明が所々あるくらいしかないのに、それなりに人はいた。

イブは意識は失っておらず、

「あっち」

とか、

「こっち」

とか指をさして宿までの道案内をしてくれた。

歩いている最中、イブが突然体をくねらせる。

「あつ、ちよつ、今胸触ったでしょ!?! んつ、宿まで我慢してツ」

そう喘ぎ声混じりにイブが言ってきた。

美少女にこう言われたら、どんな男も自分の宝剣を輝かせて抜く機会を窺うだろう。ちなみにズル剥けの奴は宝剣じゃねえからな。

それで、俺はと言うと、昼間から驚きの連続で肉体的にも精神的にも結構疲れていて、そんな中イブの考え無しのせいでイブを運ぶ羽目になり、そのイブが大剣やら剣やら短剣やら多く物を持っているせいで重くてイライラがクライマックスになっていたので、

「はぐ。」

と真顔で返した。ちよつと殺気も込めていた気がする。主観を徹底的に排し、極めて客観的になったうえで、

——こいつ泡吹いて倒れねえかな。

と思った。

「そもそもどこが胸か分かんねえよ」

「あはははは！ 死ぬ」

イブが光の早さで俺の側頭部を殴った。当然俺は倒れ、一人で立てないイブも倒れた。

そんなコントみたいなアホなことを何回かやりつつ、俺は着実に宿までの距離を縮めていた。

俺はさりげなく後ろに視線を送る。

屈強な男が四人、それぞれ槍や剣を装備して離れたところを歩いていた。得物は手に持つていないが、何かあればすぐ得物を持つてるところに手を置いている。

こちらが足を止めると、四人の男の一人がどこか指さして足を止め、四人で会話を始める。一度なら偶然かもしれないが、すでに四度。

——やっぱつけられてるよなあ。

俺は正面に視線を戻すとため息をついた。

そりゃポンと何軒も家を買えるようなお宝出したら、もつと良い宝をいっぱい持つてるんじゃないかと考えるのは普通で、力づくで奪おうと考える奴が出てきてもおかしくはない。

それに後ろからつけてくる連中は俺たちに酒を積極的に勧めてきた客たちの中にいた。これはもう窃盗を考えて酒を勧めていたと結論付けていい。

——どうすっかな……。俺は魔法が使えると言ってもまだ照明魔法しか使えないし、武器も無い。武器があったところで武器の扱いなんてしたことないから、あの四人に瞬殺される。これはもうイブの所持品全部差し出すしかないか……。

何もできずに言うことを聞くのは屈辱だが、命まで失わないためには仕方ない選択だ。

「おい、イブ」

俺は小声で言った。

イブは蕩け切った目で俺の方を見る。

「何？もしかして我慢できなくなった？ 最初から素直になれば良いのに」

「とりあえず一回死んでまともな頭に生まれ直してこい」

「は？ あたしはまともだろ？」

「ああ、まともだよ。お前ほどまともな頭した奴は他にいねえよ。それはそれとして、後ろから明らかに『これからあなたを襲います』って感じの連中がつけてきてんだよ」

「……へえ……」

イブはさりげなく視線を後ろに向けた。

後ろの四人を認めたらしく、視線が俺に戻ってきた時には肉食獣のような獰猛な笑みになっていた。

「あはは、ほんとに笑える話だよ、これは。後ろの奴ら、頭イってんぜ？」

「何が？」

頭イってんのはお前の方だし、後ろの奴らのやり方はともかく思考回路は極めて正常だと思っっている俺はイブが何言ってるのか理解できなかった。日本語っぽく聞こえるけど他の言語の空耳かな？と疑ったくらいだ。

「宿はあっち」

イブが指をさし、道案内を再開した。

とりあえず襲ってくるまではこうして宿まで歩くらしい。後ろの連中の本当の狙いは、宿の場所を知って宿に置いてある荷物まで全部奪うつもりかもしれないと俺は考えたが、どちらにせよ選択肢は無い。ここで襲われて宿まで案内しろと言われたところで拒否なんてできないのだから。ならば、成り行きに任せるしかない。

襲われないのはきつと周りに人がまだいるせいだろう。人がいなくなったら即襲いかかってくるはずだ。

さて、イブの指示通り進んでいくと、今までと違いどんどん人気の少ないところに来ていた。もうイブが故意に人気のない場所に誘導したかと思えず、俺は困惑した視線をイブに送った。

もはや周囲には後ろからつけてきている男四人だけで、その場所も家の高い塀に囲まれていて賑やかな通りからは決して見えない場所だった。つまり、ここで何が起きても助けが来る確率は極めて低い。

「やっし……」

イブの体が高熱でも出たように熱くなった。

俺は驚き、抱えていたイブの腕をほどいた。ほどき、我に返る。イブが倒れてしまう！

が、イブは倒れなかった。それどころか、赤くなっていた顔は元の顔色になり、焦点の定まっていなかった瞳は力を取り戻し、ふらついていた体は大木のごとく固定されていた。まるで酔いがどこかに

吹っ飛んでしまったようだ。

俺は後ろを振り返る。

四人の屈強な男たちがそれぞれ得物を手に走って近付いてきていた。強盗をするつもりだ。

そこからは一瞬だった。

イブが一瞬で先頭を走る男の前に移動し、首に短剣を突き刺した。時間が止まった。俺も、他の男三人も、一体何が起こったか分からないという顔をしてイブを見ていた。

その頃には男の首から短剣は抜かれ、血飛沫が塀一面に斑模様を描き、イブは別の男の首を短剣で切り裂いていた。イブは短剣を両手に持っている、この時気付いた。

息をつく暇もない、殺戮劇。

槍を構えた男が高速の突きをイブの横から繰り出すと、イブは身をひねってかわした。そこから相手が槍を横に薙いで柄の部分でイブを叩こうとするが、イブは頭を下げてかわしつつ前進し、槍を持つ男の胸に一突き、すかさず頭に一突きし、男は血を噴き出しながら仰向けで倒れる。

「……………う、うわああああ……………」

最後に残った一人が情けない声を出して一目散に逃げた。イブはまるでバツタのように高く跳躍し、逃げている男の背中に飛び乗り、そのまま短剣を持つ右腕を振り上げ、上から真っ直ぐ首を貫いた。うつ伏せに倒れていく男を踏みつけながら、イブは俺の方に歩いてくる。

イブは途中で倒れている男の近くでしゃがんだ。血に染まった二本の短剣を男の服で丁寧に拭き取り始めた。

「な、こいつら頭イってただろ？」

「……………はっ。」

目の前の光景に衝撃を受けていた俺は、かろうじて一言だけ声を発することができた。

俺の眼前にはまるでそういうアートがあるかのように塀も、地面も血に染められていた。どこからか不良少年が現れ、『びっくりしたっ

すか？ これペンキなんすよ』と得意気に笑ってくれたらどれだけホツとするか。

だが、これは現実で起きた殺人劇だ。

「考えてもみなよ。こいつらじゃ手に入らない物をあたしが持つてるってことは、どう考えてもあたしの方が強いわけじゃん。そんな簡単な理屈も分ならず強盗しようなんて、頭イってるとしか考えられな
いって」

「……ていうか、イブ。お前、泥酔してたんじゃ……」

「泥酔なんて軽い状態異常じゃん。魔力だけの魔法で回復余裕よ」

「……お前……マジか……」

このマジかには色んな意味が含まれていた。

泥酔を回復できる魔法を使うこと。平然と四人の男を殺したこと。いつでも泥酔から回復できたにも関わらず、ここまで運ばせたと。しかも結構重い。

「なんで店出てすぐ回復しなかった？」

「あんたの苦しむところが見たかったから」

「畜生が！」

そこで、ひつという女の声が聞こえた。

第7話 合格！

声が出た方を見ると、リアが口を両手で押さえて俺たちと死体を凝視している。

イブが下唇をペロリと舐め、微笑む。拭き終わった短剣を持つ両手をだらりと下げつつ、リアの方にゆっくり歩き出す。

リアは金縛りにあっているようにその場から動かない。

「おい、イブ。何する気だ？ まさか殺さないよな？」

イブとリアの間に滑り込み、リアを庇うようにして言った。

「殺すけど。なんで殺さないの？」

イブは不思議そうに首を傾げた。殺さない理由が本当に分からないという表情だ。

「なんでって、お前は強いじゃないか。この子がお前の脅威になるわけがない」

「脅威になるならないは関係ない。あたしに敵対する奴は全員殺すだけ」

「この子はいつらと違う。強盗なんてできない」

「ふくん。じゃあ、なんでこんな場所に来たのさ？ こいつらみたくつけてこなくちゃ、ここにはこないよ」

「あ……あう……」

リアは恐怖のあまり声が出ないらしい。言葉ですらない音を口から出すので精いっぱいのようなのだ。

イブが短剣を持った両手をガンとぶつけた。良いことを思いついた時に手を叩くあれだ。

「じゃあ、こうしよう。その子が武装してなかったら、敵対するつもりはなかったってことで見逃してあげよう。でも武装したら、殺す」
その言葉は日本語ではなく、この世界の言葉で伝えられた。

チラリとリアを見ると、大きく目を見開いている。

イブに視線を戻すと、リアに向かってハズアップのジェスチャーをしていた。

「うわあああああー！」

リアが絶叫し、俺の首に包丁を突きつけた。よく犯人が人質を盾にするシーンが映画であるが、まさにそんな感じだ。ヘッドロックしつつ、首筋に包丁が当てられている。

「お兄さん、ごめんなさい」

囁くような声で、リアが言った。

リアの両目からは涙が流れている。

「もしわたしを殺そうとしたら、このお兄さんを殺す。だからわたしを見逃して！」

どうする？

照明魔法を閃光弾のように使ってリアの目を眩まし、その間に逃げるか？

それしかない。

俺は意識を集中させた。体が熱くなる。

「イブさん！ お願い！ 助けて！」

「ライ——」

グチュグチュ、という音がした。生温かい液体が顔にかかる。視界が赤く染まった。呪文の言葉が途中で止まる。

俺がおそるおそるリアを見ると、リアの額と鼻に短剣が突き刺さっていた。さっきのグチュグチュという音は、短剣が刺さった音。リアは即死していた。

俺はリアの力の無くなった腕を振り払った。俺が支えになつていたらしく、リアは地面に倒れた。

吐き気。シヨックによる意識の混濁。それらが俺に襲いかかる。

「おい、アダム。お前今何しようとした？」

「な、何って……」

俺は上手く言葉を話せなくなっていた。イブの殺気と怒気が俺に向けられているからだ。

「照明魔法使おうとしたよな？ あ？ こんな時間のこんな場所で。んなことしたら、その光を見た大通りの奴らがここに来るだろうが。お前はあたしにそいつら全員殺させたいのか？」

「それは……すまん。悪かった。俺の考えが足りなかった」

それを聞くと、イブから殺気と怒気が霧散し、無邪気な笑みになった。

「分かりやいいんだよ、分かりやあ。それにしても、この女もひどい女だよな。命を救おうとしたあんたを盾にするんだから最低な女だよ」
「違う……」

俺はリアを思い浮かべていた。リアは俺を盾にすることを葛藤していた。

「何が違うのさ？」

「お前には分からないのか？ あの子はお前が怖くて仕方無かったんだ。包丁を捨てても、お前が見逃してくれるかは分からない。だから俺を盾に使うことで、お前からアドバンテージを取ろうとしたんだ。お前と対等な立場になり、自分を見逃してもらえる可能性を引き上げようとしたんだ」

「じゃあ、リアの言うこと聞いてあんたがリアに連れて行かれるところをここで突っ立って見てればよかったわけ？」

「そうすれば、殺さずに丸く収まった」

「リアが逃げ切った後、あんたを殺してたらどうする？」

「あの子はそんなことしない」

「なんでしないって分かるのさ？ じゃあもしあたしがリアに捕まっていたら、あんたは大人しくリアを見逃すのか？ 安全になった途端にあたしは殺されるかもしれないの！？ なんて薄情な奴なんだ！」
「何……言ってるんだ？」

血のにおいが充満している。気分が悪い。

倒れそうになるのを必死で堪え、俺はイブに言った。まるで俺がイカれてるみたいな言い方を、イブはしている。冗談じゃない。イカれてるのはイブの方だ。

「殺さずにリアの気を失わせるだけでよかったですだろ？」

「それは無理。それをやったらあんたの首が切られるかもしれないなかった。腕を動かす余地なく即死させないといけなかった。言っとくけどさあ、リアはこの五人の中じゃ一番頑張った方だよ。あたしに得物を投げさせたんだから。貫通しない力加減で投げるのって結構難し

いのよ」

「……なんで、そんな簡単に人を殺せんだよ？」

俺が血を吐くように言った言葉を聞き、イブは首を傾げる。

「なんで殺せないの？ ゴキブリとかアリとかカエルとかは殺してよくて、なんで人間は殺しちやだめなの？ ゴキブリだって別に人間の命を脅かすわけじゃない。虫もそう。ただ鬱陶しいから、気持ち悪いから、不快になるから、それだけの理由で殺すじゃん。じゃあ人間も同じ理由で殺していいじゃん。同じ命なんだからさ、平等に扱わないと」

ここまで心に響かない平等主義は他に無いだろう。

何故、人間を殺しては駄目なのか？ それは質問が間違っていると何故分らない。人間なんて殺していい。そんなのは誰だって気付いている。だから質問するならこうだ。

何故人間を殺す気にならないのか？ 幾つも理由はある。人を殺さないのが大多数の世の中で人を殺せば異端者となり世間から弾かれるから。人間には感情移入できるが、それ以外の生物に感情移入はできないから。法律で罪に問われるから。

だがそれらの理由をあげたところで、イブは納得しないだろう。イブの中ですでに価値観が完成しているのだから。極端な言い方をしてみれば、こいつは狂信者なのだ。

真夜中、これまでの疲労、曇みかけるようなショックな展開に俺の脳はショート寸前らしく、俺の意識は朦朧とした。血の池となっている地面に倒れ込む。顔にべったりと血が付き、前面はシャツもズボンも血で赤く染まった。

イブが俺の頭の前にしゃがむ。

俺は力を振り絞り、頭を上げてイブを見上げた。イブは楽しげな笑みをしている。

「あたしと一緒にいるの、嫌になった？」

ゾクリと、背筋に悪寒が走った。イブから溢れだしているものは殺気。俺は武芸の達人ではなく素人だ。その素人ですら感じる殺気なのだから、イブは本気マジつてことだ。畜生……。

ここでもし嫌だと言え、俺はイブの味方からリアと同じ目撃者になる。さつき言っていたではないか。もし照明魔法でここに人が集まったらそいつら全員殺すと。リアを殺した本当の理由も、武装していたからではない。イブのしたことを目撃してしまったから、リアは殺された。武装してなかったら逃がすなんて、ただの嘘。リアをおちよくっただけだ。

俺は震えている体に気付かれないのを祈りつつ、ゆっくりと首を横に振った。

「あたしと一緒にいてくれるんだ。なんで？」

「お前と一緒にの方が……面白そうだからだ」

「そっか。ようこそ、あたしのパーティへ。アダム」

俺は確信した。

飲食店での出来事。イブがわざわざ人を押しつけ注目を集めつつ、家は何軒も買えるようなお宝を軽く出した理由。

イブは強盗させようとしたのだ。飲食店にいた誰かに。俺の目の前で人を殺すために。俺がそれを見てもイブといることを望むか確かめるために。

言ってみれば、これはイブのパーティに入るための最終テスト。そして、俺は『合格』した。

「なあ……一つ訊いてもいいか？」

「何？」

「俺は……何人目の『アダム』だ？」

イブはにっこりと満面の笑みになった。

「あんたで四人目。あんたの演じる『アダム』は最後まであたしについてこれるといいねえ」

ドキッ、死ぬまで一緒!? 美少女と奴隷以下の生活、始めました。そんな売れないラノベタイトルみたいなのが頭をよぎった後、俺は意識を手放した。

第8話 不穏な奇跡!

目覚めたら、二つあるベッドの内の一つに寝ていた。どうやらここまでイブが運んでくれたらしい。もう片方のベッドはイブが寝ている。

それから、宿の近くにある服屋でイブが俺の服を買ってきてくれた。

血まみれの服から新しい服に着替える。その着替えを何故かイブはガン見。

「……なんだよ?」

「パンツ脱がないの?」

「脱いでほしかったらこっちみんな」

「別に脱いでほしくないぞ」

イブはガン見を止めない。

この部屋はそもそもワンルームでベッド二つしか置いてなく、他の家具もタンスしか無いため、見えない場所で着替えるということができない。

「なんで俺をじっと見る?」

「変わらないな、と思つて。他のアダムは変貌したよ。別人みたいに なった」

「俺はお前の味方なんだろう? だったら俺を殺さないよな?」

「うん。ハマしなかつたらね」

ちよつと待て。味方でもハマしたら殺される対象になるのか?

これは慎重に行動しないとな。

イブにはプリケツを見せつつ下着も全部着替えると、イブと昨日夕食を食べた飲食店に行った。朝食を食べるためだ。まだ一日経っていないため、好きなだけ食べれるだろう。

リアが殺されたことを知っている俺は正直気が重かったが、イブは鼻歌混じりのルンルンステップで飲食店まで歩いていた。俺はそんなイブを二度見し、深く考えるのを止めた。

飲食店に着くと、店主が慌ただしく店から出てきた。

「ああ！ ちょうど良かった！ リアを！ リアを知りませんか!?」
「ど、どうしたんです?」

「実はあなた方が店を出た後、ガラの悪い連中が後をつけるように出ていきましてな、リアがもしかしたら襲われるかもしれないと心配しましてそいつらを追いかけたんです。店を出ていく際、一応護身用で包丁は持たせたんですが、この時間まで帰ってこないのです。何か知りませんか?」

「……いえ」

俺は両手を握りしめていた。やっぱりリアは強盗なんて考えちゃいなかった。

店主は肩を落とした。

「そうですね……。いえ、気になさらないでください。さあ、どうぞ。とびつきり美味しい朝食をご用意しますよ」

店主に店内を案内され、テーブルにある椅子に座った。

店主が離れると、俺は店主に会話を聞かれないようにイブに顔を近づける。

「強盗しようとした奴らとリアの死体をどうした?」

「今頃デーモンの血肉の一部になってるんじゃないかなあ」

イブはまるで『今日の天気は晴れです』と言っているような気軽さでこの言葉を言った。

俺は戦慄した。

デーモンとかいう化け物がある場所まで死体を運んで、死体を処理させたっていうのか。

「……そうか」

怒りや悲しみ、虚脱感、あらゆる感情がぐちゃぐちゃに混ざりあっている。

だが、負の感情だけでなく、高揚感も確かにあった。

日本で暮らしてはまず味わえない、この体験。自分の中で形成されてきた世界がぶっ壊れる感覚。

俺はイブの顔を何気なく見た。背筋を冷たいものが撫でる。

イブは不快感丸出しの顔で、店の入り口を見ていた。

俺もおそろるおそろるイブの視線の先を見る。見た瞬間、言葉にできない衝撃が胸を襲った。

店主が慌てた様子で入り口前に転がりでてきた。

「ああー。リア！ どこへ行ってたんだ!? 心配したんだぞ！」

「店長、心配かけてごめんなさい」

リアが頭を下げた。

そばかすのある顔。金髪。青い瞳。豊満な胸。土と血で汚れた服。それら全ての要素がリア本人だと主張している。唯一の違和感は、ずっと左目が閉じたままだということ。

——おいおい、リアは間違いなく死んでたはずだぞ……。

すぐ傍にいた自分が、そのことは一番分かっている。ならば、あの女は誰なのか……。

「まあいい。早く着替えて、あの方たちの食事の用意を手伝ってくれ」
「あの方たち？」

リアが俺たちの方を見て、弾けるような笑みを浮かべた。
小走りで近付いてくる。

「ようこそいらっしやいました！ わたしの名前はリアです！ このお店の料理はどれもすごく美味しいですから、期待しててくださいね」

「おいおい、どうしたんだ？ その方たちは昨夜この店を貸切状態にしたお客さまだぞ。この店の料理はほとんど食べているだろうし、そもそもお前が出歩いたのも、お二人が心配だったからだろう」

「え、昨日？ うツ、頭が痛い……。何も思い出せない……」

リアが苦しげに頭を抱えた。

「リア……どうやらお前は酒を飲みすぎたから、朝帰りなんてしたんだな。もう今日は仕事をしなくていい。休んでなさい」

「……はい」

「あのツ」

俺は口を挟んだ。

「左目、どうかしたんですか？」

「ああ、この目ですか。わたしにもよく分かりません。起きたら、見え

なくなっていました」

リアは左目のまぶたを上げた。

俺は息を呑む。

左目になればならない眼球が無くなっており、ただ真っ暗な窪みになっている。

「それでは、失礼いたします」

リアが店から出ていった。

「……イブ、一体どうなってんだよ」

俺は小声で問いかけた。

「これは多分、蘇生魔法か復活魔法だね。誰かがリアを蘇らせたのさ。左目の眼球を供物として。それと、昨日一日の記憶を消去する忘却魔法も」

俺の目からは涙が溢れていた。涙が溢れつつも、俺は笑い声をあげていた。

「なに、笑ってんのさ」

不機嫌そうなイブの声で、俺の笑いと涙は引っ込んだ。

そして、俺は思い至る。再びリアを殺す可能性に。

「また殺す気なのか」

「は？　なんで？」

「リアが生き返ったことに不快そうだから」

イブはぼかんとした表情を一瞬した後、小さく笑った。

「リアは記憶消されてるから、殺すまでもないよ。あたしが不快になつたのは別の理由」

「じゃあ、なんで？」

「考えてもみなよ。あたしは人がまず入ってこない場所に死体を捨ててきた。なのに、リアは生き返ってる。放置した時間が長ければデーモンに喰われて生き返らせることはできない。というところは、あたしを監視してるかつけてる奴がいるってことさ。胸糞悪い話だろ。あたしのどこに目をつけられるところがあるんだよ」

「あー……そうね」

目をつけられるとこだらけだろと思ったが、面倒くさくなりそう

だから口には出さなかった。

第9話 買い物!

さて、色々あったが、俺はイブの正式なパーティーメンバーになった。なんのパーティーかは言わずもがな、冒険のパーティーだ。冒険とは何か。血沸き肉躍るワクワクドキドキモンスターや、頭ぱつぱらぱらのイブみたいなサイコパスとくんずほぐれつぶつ殺し合うことだ。あく楽しみ! ほんと楽しみ! はあ……。

で、みんなに質問だ。バトル・ロワイアルを勝ち抜き、金銀財宝素材をがっぽり手に入れるにはまずどうしたらいいか。答えは装備だ。何よりも装備を整えることが重要だ。

そういうことで、俺たち二人はショップにいた。様々な武器や防具、装飾品、アニメや漫画でしか見たことないような紋章が入っている物(多分マジックアイテム?)がずらりと店内に並べてあった。

イブはこういうことになりに慣れていよう、店内の物をテキパキと選んで買っていた。

それら(多分イブ一人分の体積があった)を軽々と持ち上げ、俺の前にズンツ! と置いた。

「はい、これ」

はいこれって言われましても……。

俺はどう対処していいか分からず、無言で目の前の物体を凝視した。身の丈ほどの木製の杖、革製の衣服、指輪が四つにネックレス一本、その他革袋や革水筒といった消耗品がどっさり。

——どう返しゃいいんだよ……。

まずこれを持ってないから、ありがとくなどと言いながら持つ選択肢はない。

かと言ってここで即着替えるのもNG。店主と用心棒は男だが、その後ろにちよこんと明らかに自分魔法使いつす! って格好の女の子がいるし、一応イブもいる。

「何固まってるの?」

「そりや固まるだろ。こっからどうせいっちゅうねん」

「装備してけばいいじゃん」

「公衆の面前だぞ！」

「そこに更衣室があるじやろ？」

イブが一つの扉を指さした。

「えっ!? あれ更衣室!?! てっきり倉庫か物置きだと思ってたわ」

「倉庫ですけど？」

ずっとだんまりを決め込んでた魔法使いチツクな女の子がポツリと言った。

場の空気が急速に冷えていく。

「イブ、お前……」

「更衣室だよ？」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

「えっ」

その場にいたイブ以外の全員が同時に言った。

「更衣室だよな、あそこ。このご時世、買った装備をその場で装備できない武具屋があるわけないもん」

「うっ……!」

店主が呻きに近い声を発した。イブは的確に店主の弱点に言葉のナイフを突き刺したようだ。

ここでイブさん、渾身の一言。

「その場で装備できないってんなら、他のお店に行っちゃおうかなあ
ああああ？」

店主の顔がみるみる青くなっていく。

これだけの売上がパアになるだけでなく、今後イブとの取引も無くなる
と考えたら、ここでイブを他店に行かせるリスクの大ききくらい
素人の俺にも分かる。

「ご、五分待ってくださいああああい！」

やがて店長は絞り出すような声でそう言った後、倉庫改め更衣室に
飛び込んだ。

イブをチラッと見ると、俺に向けてどや顔でサムズアップしてい

る。

いやお前、別に良いことしてないぞ、と思ったが、口には出さなかった。

それからちようど五分で店長が倉庫から出てきて、弱々しく「どうぞ」と手を扉の方へ向けている。汗だくで燃え尽きたような表情の店長の姿で、どれだけの苦労だったか察しがついた。

俺は感謝の意を込めて店長に軽く頭を下げ、自分の身長近くある荷物を倉庫改め更衣室に引き摺っていった。

着替えて最初に思ったことは、この世界に染まっちまったな、だった。身の丈ほどの杖を手に持ち、怪しい指輪を両手に二個ずつ嵌め、怪しげな石のネックレスをかけ、革製の衣服にフード……まさにRPGによくいる魔術師といった見た目だ。なんとなく身体が熱くなっている気がする。

倉庫改め更衣室から出ると、イブが満足そうに頷いた。

「これで困くらいには使えるね！」

イブさん、本音をオブラートに包むことを覚えてください。

俺はハンカチがあつたら思いつきり噛んでイーツ！ とやりたいと猛烈に思った。

「あの……右手の指輪はこちらの方が……」

魔法使いチックな少女が申し訳なきように指輪を二つ差し出してきた。

イブが不愉快そうに僅かに眉をひそめる。

少女が指輪を二つ交換しろと暗に言っているのは俺も察した。

「値段ならこちらの指輪の方が安いので大丈夫です！ 安心してくださいー！」

俺たちの、特にイブの険悪な雰囲気を感じ取った少女は必死にそう言った。

店主が軽く少女を睨んでいる。高い方買わせておけよ、とその目が言っているのがよく伝わってくる。

「値段は特に気にしてないんだよ。たださあ……こつちも考えて右手の指輪選んだのよ。納得できる説明をしてくれる？」

魔法使いチックな少女は泳がせていた目をイブに固定した。イブと正面からぶつかる覚悟を決めたらしい。

二人のやり取りがどうなるのか……というより、イブがどういう行動を取るのか、俺は興味を惹かれていた。イブのことをもっと知りた。一応言っておくが、イブに対する恋愛感情などこれっぽっちもない。イブという生命体がどういう生態なのかという純粋な好奇心からくるものだ。

「楽しそうね、アダム」

イブが視線をこちらに向けた。

俺は咳払いをして、イブの視線から逃げるように顔を背ける。

「装備は同じデーモン属性の素材で揃えると共鳴現象を起こし、より効果が高くなるのはご存じですよね？」

「当然！ だから魔獣属性でアダムの装備を揃えたのよ。それをあんたがイチャモンつけてくるからムカついたんじゃない」

魔法使いチックな少女はイヴの険悪な雰囲気^{アム}に体を縮こませ、目を泳がせてしまっている。

俺はすかさず間に入った。

「まあまあ、そんな喧嘩腰じゃこの子も話せないだろ。もっと心広くしなうぜ。な！」

「アンタはあたしのなんだ？ 保護者か？」

「どっちかはともかく、お前が選んだ装備よりこの子の選んだ装備が良ければ、俺たちにとってプラスだろ。急に話に割り込んでゴメンな。話を続けてくれ」

「あ、はい」

魔法使いチックな少女は呆気にとられたように俺たちを見ていたが、俺の言葉で我に返ったようだ。

「魔獣属性は他の属性と違って種類が桁違いに多く、属性の他に系統があるんです。これはあまり一般には知られておらず、私のような魔法付加師^{エンチャンター}の中だけでの常識です。で、お客さんの装備は衣服の素材がバイトウルフ——」

「バイトウルフ!? 狼がバイトしてんの!？」

「どんなウルフでもバイトしますよ。このウルフは特に噛む力が強力だからバイトって呼ばれています」

「ああ、そっちのバイトか。オーケー、理解。続けて」

「はい。で、その杖がビッグバウの骨と魔石、左手の指輪二つに使われているのがアイスフオックスの魔石、ネックレスに使用されているのがビッグバウの魔石と、ここまでは全部犬系統の魔獣なのでとても相性が良いです。ただ右手の指輪二つに使われているチョップベアの魔石だけは犬系統ではありません。なので、こちらのバイトウルフの魔石が使用されている指輪をオススメしました。衣服にバイトウルフの毛皮が使われているから、より強い共鳴になってお客さんの力になります」

「あなたの言い分は分かった。そっちに代えさせてもらうわ」

「ありがとうございますー！」

イブは店主に代金を渡し、魔法使いチックな少女から二つ指輪を貰った。

俺はイブから指輪を受け取り、身につけた。確かにさつきより身体が熱くなり、何か装備品から溢れているのを感じた。おそらくこれがこの子の言った共鳴なのだろう。

その時何気なく店の壁を見ると、何枚か似顔絵が書かれた紙が貼られていた。翻訳お札のおかげで文字を読めるため、それが手配書だと分かる。

——ん？

その中の一枚に視線が釘付けになった。長髪で黒髪の少女が書かれているその手配書は、短髪にすればイブに少し似てるかもしれないと思っただからだ。名前はサエキ・ヨーコとあるため、日本人名である可能性も高い。

手配書の罪状は『キングスレイヤー王殺し（デイシングラ国王殺害）』。

イブと名乗る原因でこの理由だけはやめてくれ、と俺は初めて神に強く祈った。

第10話 旅立ちの時

武具屋を出た。

イブは俺の前を上機嫌そうに歩いている。

俺はイブに手配書のことを訊くはずと迷っていた。手配書が本当にイブなら、明らかな日本人がイブなどというふざけた偽名を使っていることに納得がいく。そして確実なのは、イブは絶対にこの話題に触れないということだ。俺は手配書に気付いた。なら、イブが気付かないわけがない。

訊くか訊くまいか、俺は心を決めた。

「なあ、イブ」

「ん？」

イブは笑顔で振り返った。

「なんでお前は『イブ』なんだ？」

「なんでって、ここが異世界だからさ。元の世界の名前になんの意味がある？ どうせゲームみたいな世界なんだ。ゲームみたいな名前で遊んで何が悪い」

「そうとも、ここは異世界で元の世界の名前なんて何の価値もない。偽名と同じだ。親しんでいる名前を名乗らない意味が俺は逆に分かるねえな。」

「ここからは俺の想像だが、お前は異世界にきた最初、本名を名乗っていた。だが何か問題を起こし、本名でいることが危険になった。だから、イブなんて偽名を必要としたんだ。違うか？」

「……手配書を見たんだな？」

イブの目が据わる。溢れるのは殺気。

俺の顔は血の気が引き、緊張のあまり唾を飲み込んだ。

「やっぱり、国王を殺したのか。今いるこの国の王ではなく、別の国の」

「刺客を使ってあたしを殺そうとした。だから殺した。どっかおかしいか？」

「そもそもその国王は何故お前を殺そうとしたんだ？」

イブは沈黙した。どう話そうか考えているようだ。

「……簡単に言えば、あたしに報酬を払いたくなかったからさ。その国はここからずっと北にある国でな、デーモンも海や空にいる奴らが大半で、陸のデーモンはほぼいない。今、海や空のデーモンが大半と言ったが、それは割合の話。デーモンの絶対数は限りなく少ない」

「この世界は北の方が安全ってことか」

「デーモンの脅威はな。国土の奪い合いは北の方が苛烈さ。デーモンの脅威がないからこそ、その国土は安全に統治できるからな。野心家にはさぞ魅力的な土地に見えるだろうよ」

「……それで、今の話がお前の王殺しとどう繋がる？」

「その国をドラゴンのデーモンが襲撃したのさ。デーモンの襲撃が滅多にないその国はパニック状態になり、ありとあらゆる手段でそのドラゴンを討伐しようとした。当然ドラゴンを倒した者は国土の五分の一と大金を用意するという依頼も世界中に飛び交った。そんな中で、あたしはそのドラゴンを討伐した」

「なるほど、殺したくなるわけだ」

飲食店を貸し切りにする時に使った上級クラスの魔石はこのドラゴンのもものかもしれない、と俺は思った。

イブは無表情になる。

「こんな話をわざわざしたってことは、あたしと別れたいんだよね？」
「別れたい？ んー……」

俺は何故イブに手配書のことを言おうと思ったのか。イブと別れたいから？ いや、違う。ただ単に好奇心を満たしたかっただけだ。イブと別れるのは本格的にヤバくなってからでいい。

「別れたいわけじゃない。手配書を見た時のモヤモヤした心を晴らしたかっただけ。俺はイブと旅を続ける」

今のところは、と心の中で付け加える。

そんな俺の本心が見抜けなかったのか、イブの眼から唐突に涙が溢れた。イブは自分の泣き顔を見られたことがよほど恥ずかしかったのだろう。顔を真っ赤にしながら、ゴシゴシと右腕で目元を拭う。

俺は何故、イブが急に感極まったのか、はたと気づいた。

イブは俺を四人目のアダムと言った。少なくとも三人はイブに愛想を尽かし、別れた。お尋ね者になってからはもっと人が寄り付かなかった筈だ。仲間になってもすぐ別れてをイブは繰り返して続けたのだらう。イブはずつと孤独だった。だから、イブの境遇を知っても一緒に旅を続けると俺に言われたことが嬉しかった。きっとそう
だ。

——案外、純粹なのかもな。

純粹だから、狂気がある。常識は個人の環境によるものだからだ。ヤバい環境で生きていたら、純粹であるほどヤバい思考に染まる。

「なあ、アダム」

イブが照れくさそうに言った。

「ん？」

「その装備、なかなか良い感じだぜ。匣以上戦力未満つてとこだね」
「俺のこと舐め過ぎだろ。確かに今は魔法一つしか使えねーけど、これから魔法ガンガン覚えりゃ戦力にはなると思うが」

「けど、肉体強化は雑魚じゃん。その立派な杖で思いつきりあたしの頭を殴っても、別になんともないだらうね。非力なあんたじゃ」

「……ほお、俺がこの杖で殴ってもなんともないですか」

「モチのロンよ！」

俺はウズウズしてきた。言質はもう取った。あとは実験するだけだ。

「あ！ あんなところにドラゴンが！」

「え!? どこどこ!?」

俺が指を差した方向にイブが顔を向ける。

俺はその背後からゆっくり杖を振り上げ、思いつきりイブの後頭部目掛けて振り下ろした。

「がッ!」

イブは叫び声をあげ、そのままうつ伏せに倒れた。後頭部からどくどく血が流れている。

はい。これで、俺が杖でイブを殴ってもなんともなくないことが分

かった。証明完了、Q・E・D。

そこで武具屋の扉が開き、魔法使いチツクな少女が出てきた。少女は目の前の惨状に即気付き、慌てて駆け寄ってくる。

「何やってるんですか!？」

「いや、殴られてもなんともないって言うから……」

「冗談に決まってるでしょう! たとえ本当でも、試してみる人がどこにいますか!？」

「少なくともここに一人いるな」

「早く助けないと!」

そんなやり取りをしていると、倒れているイブに変化が起きた。イブの体が淡い光に包まれ、後頭部の傷が巻き戻しの映像を観るようになった。どんどん元通りになっていく。最終的には殴られる前と全く同じになった。殴られる前と唯一違う点は、血の跡があることだ。

イブの体から光が消えると、イブがガバツと勢いよく起き上がった。そして、光の速さで俺の胸ぐらを掴む。

「いきなり何してくれとるんじゃワレエ!」

「いやいや、自分が殴られても大丈夫って言っただろ!」

「それもそうだね」

「切り替え早ッ!」

魔法使いチツクな少女は思わずツツコミを入れた。

イブが俺の胸ぐらを掴んでいた手を離す。俺は内心殺されるかもしれないと感じていたので、ホツと一息ついた。

「あの、お二人はこれからどちらに向かわれますか?」

「南」

魔法使いチツクな少女の問いに、イブが素っ気なく答えた。

少女の瞳が輝き出す。

「よろしければ、わたしを旅のお供に加えていただけませんか?」

「店はいいのか?」

「はい。魔法付加師エンチャンターは基本的に店を持ちません。武具屋やギルド、領主さまから売り場を借りさせてもらって売り上げの一部を渡す条件で商売させてもらうんです」

「なんで渡り売りみたいになるんだ？」

「魔法付加はデーモンの素材や魔力を浴び続けた動植物といったものの方がしやすいし、効果もより高くできますから、必然的にそういった素材を自前で用意しなければなりません。一つの場所に留まれば素材はどんどん無くなりますし、素材の種類も偏ります。冒険者から素材を買うにしても、冒険者は足元を見るので高くついてきちゃうんです」

「なるほどな」

デーモンとやらの化け物の素材で商売するなら、当然のやり方だ。

「イブ、どうする？」

「ま、いいんじゃない、付いてくれば。そのかわり、最低限自分の身は自分で守ってね」

魔法使いチックな少女の顔に笑みが浮かび、彼女は深々と俺たちにお辞儀をする。

「わたしの名前はピュレ・チスタタと言います。これからよろしくお願いします」

「ああ、よろしく、ピュレさん」

俺は初対面の女性をいきなり呼び捨てにできるほどパリピではない。イブは例外で、こいつは俺を騙したから礼儀などいらないので呼び捨てだ。

「あ、もしかしたらあの武具屋に忘れ物したかも……」

イブは武具屋の扉を開き、武具屋の中に消えた……と思ったなら、すぐ出てきた。別に何か持っているわけでもない。

「ごめんごめん、別に何も忘れてなかったわ」

「あ、そう。なら、そろそろ行こうぜ」

イブに近付き、俺は背筋が凍りついた。強盗三人とリアを殺した時のような冷たい目をしていたからだ。その視線はピュレを捉えている。

「あ、そうだね。行こうか」

イブの表情がいつもの楽し気な表情になり、イブは町の外へ続く道を歩き出す。

俺は何故ピユレを一瞬敵視したのか、暇潰しにそれを考えながらイブに付いていき、その更に後ろをピユレが付いてきた。
どうやらこの三人で旅をすることになりそうだ。

第1話 イブとピュレ

町が石壁で囲まれているのを知ったのは今が初めてだった。町の門と石壁が作られていて、目測約三メートルの高さがある。

「デーモンの襲撃に備えてるんです」

魔法使いチックな少女——ピュレが石壁をジッと見る俺の視線に気付いて言った。

俺は視線の先をピュレに変更する。

「俺はデーモンとやらを見たことないからあれだけど、心許ない気がするな。簡単に壊されて突破されそうだ」

「あれはただの石壁ではなくて、呪文が彫つてあるんですよ。デーモンには共通して嫌いな臭いがありまして、その呪文を見ると嫌いな臭いを感じる幻覚にかかるんです」

「呪文そのものが術式になるのか。魔法は奥が深そうだな。」

一つ質問があるんだけど、もし君が俺の体に何かしらの呪文を彫つたら、条件で発動する魔法になるのかな？」

ピュレは少し首を傾げ、顎に右手を当てる。

「えーと、物質に呪文を彫るのと生物に呪文を彫るのではやはり抵抗力の差があります。物質は抵抗力が低いので魔法を発動させやすいですが、生物は意思を持つので抵抗力が高く、上手く魔法が発動しない可能性が出てきます。また魔力のある物質と魔力のある生物では、より顕著にその違いが出てきます。アダムさんは魔力があるので、わたしがアダムさんの体に呪文を彫っても抵抗力のせいで上手く魔法が発動しないですね。死体になったら話は別ですが」

「あッ、そうですか……」

俺はピュレの何気ない最後の一言に寒気を覚えた。死体を魔法を発動するためのトラップに使用している光景が頭をよぎったからだ。

俺はイブを見る。

イブは無表情のまま、ずっとだんまりを決め込んでいるからどうしても気になってしまう。

「イブ、さっきからどうした？」

「考えてる」

「何を？」

「いずれ目に見える形で分かるよ」

「重要じゃない？」

「んん、命に関わるくらいには」

「クソ重要じゃねえか」

命に関わる考え事を無関心でいられるわけがない。

「わたしの命にも関わりますか？」

ピュレがおそろおそろイブに訊く。

イブは満面の笑みになった。

「アンタが一番関係してるよ」

俺はイブが冷たい目でピュレを見ていたことを思い出した。さり気なくイブとピュレの間に移動する。

「殺す気か？ 彼女を」

「それを考えてる」

「何故？」

「その子があたしの手配書をあの店から持っていったからさ」

俺は思わずピュレの方に振り返る。

ピュレは顔を青くして、目を見開いていた。

「それは、あの……」

「あ、弁明あるんだ。言ってみ？ 理由によってはこの場で処さないであげてもいいよ」

「可能性の一つとして、旅の途中にイブさんが死んじゃうかもしれないじゃないですか」

「可能性としてはあるね」

「ですよね!? そうなった場合、手配書があれば懸賞金が貰えるなっ
て思っ」

「なるほど」

イブはうんうんと頷いている。ずっと笑顔のままだ。

ピュレは気付いただろう。イブの殺気に。俺は話した時から

感じていてチビリそうになっている。

「どうすればわたしは処されないのでですか？」

「手配書を目の前で処分すればいいよ。そもそもわたしは死なないから、手配書持つても無駄だし」

「さつき、死ぬ可能性あるって言ってなかったか？」

「言ったけど、極めて低い可能性だから、ゼロパーセントと同じ」

「いや、全然違うだろ……」

俺は頭を抱えそうになった。

「ま、あたしが死ぬならあんたらも死ぬよ。一蓮托生ってやつ」

「言ってること最悪だぞ。そこは『あたしが盾になつてる間に逃げろ』ぐらい言うところだろ」

「お前が言えよ、男だろ」

「それは一理ある。でも俺は自分に正直でいたい」

「あたし以上に最低なこと言ってるよ」

ピュレは革製のバックパックから手配書を取り出し、イブに見せる。

イブがゆっくり頷くと、ピュレは手配書をビリビリに破り、その後八つ当たりと言わんばかりに小さく呪文を唱えて手から火を出して手配書を燃えカスにした。

イブはピュレに近付き、ぽんぽんと肩を叩く。

「これであたしらは仲間だ」

「一つ言わせてもらいますけど、わたしは逃げ足には自信がありますから、一蓮托生ではないです」

イブはぽんと手を叩く。

「……ああ、合点がいった。なんで南に行きたがるか気になってたんだ。手配書のことと同じくらいには」

「なんで南に行くことがおかしいんだ？」

「言ったろ？ 南にはデーモンの親玉がいると思われる森があるって。全てのデーモンはその森から来る。南に行きたいなんて頭イカれた奴そうそういないよ。元の世界に戻りたい紋章者以外は。ただ、例外はある。それはワープやゲートといった長距離移動魔法を準備

している奴だ。その魔法があれば、危なくなったらすぐ北の方に戻れるからな。安心してデーモンの魔石や素材を集められる」

「どうやら凶星だったようで、ピュレは口を魚みたいにパクパクさせて言葉を探しているが見つからないらしい。」

「あたしの手配書を持ってくわけだよ。あたしが死んだら、あたしの頭を持ってその魔法でデイングラ国に移動し、手配書に書かれている報酬を受け取る算段だったんだろ。頭良いじゃん」

「……いけませんか？」

「ん？」

青ざめていたピュレの目が据わり、イブを睨んでいる。恐怖よりこの理不尽な責苦への怒りが勝ったようだ。

「イブさんは、死んだら何も感じなくなるんです！　それが死ぬってことなんですよ！　死体は放置すれば腐るだけで何も残らない！　だったら生きている人間が少しでも得するよう再利用して何が悪いんです!?　デーモンだって殺したら魔石や素材を取るでしょ！　それと一緒に死す！」

そう力説するピュレに対し、俺はドン引きしていた。死体なら何してもいいという思想は現代人である俺にとってすぐには受け入れられない思想だ。だが、この世界のような過酷な環境ならそういう思想になるのも頷ける部分もある。

「なあ、イブ。ピュレはお前が死んだ場合のことを考えていただけっぽいし、もう仲直りしな」

「それは結果論だろうが。話す前は不意打ちであたしを殺すつもりか、あたしが死体になった場合のことを考えていたのか分からなかった」

「それは……そうだな」

その会話の最中、イブがいきなり目の前から消えた。ピュレの背後に現れ、その首に短剣を突きつける。ピュレは少し右腕を動かしただけで、反応しきれていない。

「ひっ」

「ピュレ、あんたはあたしの仲間さ。とりあえず今は。だが変なマネ

してみる。死体にしてデーモンどもの撒き餌にしちやうからな。頼みの移動魔法も発動する前にあたしに捕まるってこれで理解できたろ」

「分かりましたよ〜！ イブさんに忠誠を誓います！」

ピユレは涙目で両手を上げている。どうでもいいが、この世界も両手を上げるサインが抵抗する気がないという意思表示として伝わるんだなと俺は今学んだ。

そんな一悶着を終えた俺たち三人はようやくやく門を出た。

これから、俺の旅は始まる。

第12話 短い旅

とりあえずこれからの目的地はプリフィカシン砦というところらしい。この砦の名前であるプリフィカシンという言葉は、日本語に訳すと浄化という意味のようだ。この砦はデーモンの本拠地とされている森に一番近く、またこの砦より南に人工物は何一つないという話をピユレから聞いた。

俺はその旅の途中、ピユレから様々な呪文を覚えてもらっている。教えてもらった呪文はちゃんとメモして、財布にいれた。

「火の呪文『ファイア』……と。呪文がだいたい英単語なの覚えやすくて助かるな」

「呪文は集中力と想像力の向上のために使われるもので、絶対に必要なものじゃありません。極論、無詠唱でどの魔法も発動することができます」

「……ふーん」

俺は呪文を唱えず、光球をイメージしながら前方に手をかざした。体が熱くなり、熱が手の平へと伝播。光球が生まれ、前方を歩くイブの背中にくつついた。確かに、呪文無しでも呪文で発動する魔法が使える。呪文を使わなかったからといって呪文で発動した時より体に負担がかかるとかでもない。

俺は試しに教わったことのない魔法を頭に思い浮かべた。自分の周囲で風が渦を巻き、吹き荒れるイメージ。すなわち風の魔法。杖を握りしめ、杖の魔力が輝きを放ち始める。体の熱が放出されるのと同じ時に俺の周囲で風が巻き起こり、ピユレとイブに襲いかかった。ピユレは俺の魔力の高まりを感じとっていたらしく、俺の魔法と同時に呪文を唱え終わり、自分の正面に魔力の壁を創って風を防いだ。イブは振り返り、鬱陶し気な表情をしながら短剣を振り下ろして暴風を切った。短剣に込められていた魔力が暴風と混じり、暴風そのものが打ち消される。これはおそらく、短剣に触れた魔法を無力化する魔法が発動していたのだろう。ただしピユレの方の風は消えていなかったた

め、無力化する魔法には範囲があり、範囲外の魔法は同魔法でも無力化できないらしい。

暴風が過ぎ去ったらピュレは魔力壁を消した。

イブとピュレは俺の方を見ている。ピュレは柔らかい表情を崩していないが、イブはめちやくちや剣呑な目つきだ。おまけに殺気も感じられる。

俺はとりあえず謝ることにした。

「すまん」

「今の魔法はなんですか？」

ピュレが言った。

「風の魔法だよ。明らかだったろ」

「私知ってる風の魔法と違いますね。どのような想像で魔力を放出しました？」

「風で周囲の物を吹き飛ばすイメージだよ。台風みたいな」

「間違った想像ですね。風は本来刃として切り裂くか、浮遊するか、一方向へ風の渦を発生させるか、そのどれかが基本です。その想像では魔力が広範囲に分散されてしまって威力が弱体化してしまいます」

「なるほど、重要なのは適切なイメージか」

確かに無駄な方向にも風が生まれていたから、魔力の無駄使いは半端なかった。

「そっちの話は終わったかな？」

イブが明るい声で割り込んできた。

「はい」

ピュレはイブの明るい声に隠れた不機嫌さに気付いたようで、イブの機嫌を損ねないように従順になっている。

「よろしい」

イブが一つ頷くと、いきなり俺の胸ぐらを右手で掴み、高く持ち上げてきた。

俺はいきなりこのことで気管が詰まり、何度か咳き込む。

「見えるか？」

俺の様子など全く気に留めず、イブは左手であらぬ方向を指差す。

俺は頑張って呼吸しつつ、イブが指差した方に顔を向けた。向けた瞬間、俺の頭は苦しさを忘れ、驚愕と恐怖に支配された。

雑草の生え散らかした草むらの先にある雑木林から、様々な姿形をした怪物たちが続々と出てきている。怪物の目はどれもこちらを向いていて、俺たちを意識していることがよく伝わった。

「お前のせいだぞ」

「俺の……せい？　なんで……だよ？」

俺はなんとか言葉を振り絞った。

イブははあとため息をつく。

「デーモンは一般人より魔力のある混血を好む。そんな奴らが弱々しい風魔法の魔力を感じて、何も行動を起こさないわけないじゃん。お前は今『自分は美味しい獲物ですよ』って周囲にアピールした、魔法でな」

「マジかよ……」

俺は自分が軽率に放った魔法がいかに愚かだったか思い知らされた。

そんな中で、イブは腰のベルトの二本の剣を抜き、怪物たちの方に向く。その顔には獲物を見つけた肉食獣のような、獰猛な笑みが浮かんでいた。

「貸し一つな」

イブはそんな一言を俺に放った直後、俺の前から消えた。怪物たちの叫びが響く。俺は叫び声の方を見る。怪物の群れがイブに蹂躪されていた。イブは両手に剣を持ち、その剣の一薙ぎ一薙ぎが怪物たちを両断。辺り一面に怪物の様々な色の血がぶち撒けられている。叫び声だと思っていた声は、怪物の断末魔だった。

イブによる虐殺は数分で終わった。百体はいたであろう怪物たちが、今は地面に横たわる肉片となって動物や植物の糧となった。

「ふう……」

イブは返り血を一滴も浴びずに二振りの剣を鞘にしまいながら戻ってきた。地面が怪物の血の池地獄になっていることを考えたら信じられないことだ。どうやらイブにとって返り血を浴びないよう

に斬り込むのは朝飯前らしい。

「た、宝の山……、ウへ、ウへへへへ」

ピュレは目を輝かせながらその血の池地獄に飛び込み、デーモンたちの肉片の山を漁り始めた。いつの間にかピュレは服の上に毛皮のマントを羽織って自身を包んでいる。デーモンの血で服を汚さない備えをしているのは当然のことだった。

一時間は経っただろうか。ピュレはカラフルな血で自身を彩られながら、ニツコニコの笑顔でこちらに帰ってきた。パンパンに膨れあがった皮の袋を四つ持っている。一つ一つが明らかに持てそうになり大ききの袋だが、何らかの魔法で軽くしているようだ。

ピュレはカラフルな血で染められたマントを脱ぎ、地面に捨てた。再利用はしないらしい。その後、イブを尊敬の眼差しで見ると。

「イブさん……もしかして、デーモンの素材を壊さないように殺すのを徹底してます？　どのデーモンの魔石も壊されていませんでしたし、素材でよく使う部位もほぼほぼ無傷でした」

「ああ。だいたい素材として使う部位は同じだし、魔石の位置も胴体の中心が多いからね。そうやって殺して金を稼ぐのが癖になっちゃまったんだ」

「素晴らしいハントの仕方です！　イブさんはデーモンハンターの鑑！」

「ふふん、そうだろそうだろ！　もつと褒め讃えていいぞお」

イブは薄っぺらな胸を張った。

「よっ、天才剣士！　最強紋章者！　じゃあ、わたしは素材がパンパンになるくらい集まったので帰りますね！　さようならー！」

ピュレはイブを褒めつつも魔力を高めていたらしく、更には杖の先で地面に魔法陣をさりげなく描いていた。俺は今になってそれに気が付いた。

ピュレが魔力の渦を体に纏いながら小さく呪文を呟くと魔法陣が光を放ち、ピュレがその光に呑まれたと思うとピュレの体は跡形も無く消えていた。使い終わった魔法陣と脱ぎ捨てられた血塗れのマントだけがピュレがここに居た証だった。

俺とイブは顔を見合わせる。

やがてイブは大笑いしだした。

「あははははは！面白いヤツ！自分の心に忠実なヤツは嫌いじゃない。もう会うことはないけど、楽しかったよ」

こうして俺たちの旅はあっという間に二人旅になった。